

序章

エトの双眸は美しい。

瞳の虹彩がとても精緻でとらえがたいから。まるで複雑なオパール。青や緑や青紫や紺碧やコバルトブルーやパステルカラーの水色や蒼や碧や藍や紺のモザイク。

又は放射状に光を放つ燦々たるブリリアンカットのダイヤのよう。燦然たる光のきらめきの粒がまばゆい曙光の海のように、ちらちら揺れる。遙か涯しなく。

だが、その眼はいつも眼鏡に隠され、誰も気がつかない。彼女がいるのは、殺伐たる研究室。神学研究院の一室で、いにしへの書籍が無秩序に積み重ねられ、廃墟の壁のようであった。古さの薫が滲み、埃も積もり、エトもその中でくすんでしまうのである。

早朝から深夜まで机から離れない学究の徒エト・イン・アルカディア・エゴは、メタ・フィシユカ教授の指導する生徒の中でも変わり者であった。

彼女も時々、潮風に顔をなぶらせながら髪を靡かせ、窓の外を見降ろし、遠くを行く船の白い帆などを見つめた。紺碧の海に面する温暖で乾燥した石灰岩質の土地には灌木しか見当たらない。

遙かな紺碧の空は、永遠の真実のように見える。それなのに、それを言う語がないのは、なぜか。言葉がそれを説明できないのは、なぜか。

まるで神は人を充たされない憧憬に苦しめるために蒼穹を創ったかのように思えた。

神は全能であるという。神は全知であるという。しかし、世に正義は行われず、ただ力だけが支配する。無神論が公然と街で言われるようになっていた。神官は「神慮は人の考えを超越した本質世界にある。人倫の道理では解明できない」

だが、それでよいのか。ならば、なぜ人の胸に正義への思いがあるのか。

正義は神が人の胸に与えたものだからではないのか。理性が神に基づくものだからではないのか。そうでなければ、どうしてそれがこの胸にあり得るのか。

神さま、わたしに教えてください。

第一章 革命

ジヴィーノは肘を曲げて、ぶっ太い二の腕の、まん丸い力瘤を隆々と盛り上げる。

その上腕の太さたるや、駿馬の胴ほどもあった。大人の男でも腕を回せない。

右の前腕と、重い鉄の楯とを激しく打ち合わせ、ドワン、ドワン、ドワン！ 底響きする低音が木の葉を振るわせる。

彼は決意したのだ。王命が、いったい、何であろうか。王など遷移すべき現象に過ぎない。だが、戦士の正義と、我がブルーデン族の誇りは移ろわぬ真実在、永遠だ。躬體を聖なる炎が突き上げる。

「うおうおっほっほっほっほおーっ！」

雄叫びと、楯を打つ音とが黒雲の蔽い始めた空に鳴り渡った。山野に木霊した。

「戦だーっ」

鉄鉾のついた革の胴巻きに、ぶ厚い鉄の肩当てや脛当て、ヘラジカの大角をつけた鉄兜、引き摺るような顎髭を生やし、身の丈は9フィートも超える大巨漢だ。

その咆哮に応え、同じく巨漢の戦士どもも起き上がり、口々に叫ぶ。

「やったぜーっ！」

「うおーっ、戦争だ、戦争だ。ぶっ殺せい」

ただ、ただ、興奮して絶叫し、暴れ回る者もいた。

「いいいひひひーついいいいいいいいいっほうーっ」

「おー、おー、おー、おー、おー、おー、おー、おー！」

物凄い大きな手でハイタッチ。全員が剣の柄と盾を打ち鳴らす。大木の幹を殴る。樹は大きく揺れ、幹には拳の形に2インチも凹んだ跡が残る。

「ガリーのゴーニユの奴ら、ぶちのめしてくれるぜ」

彼らにとっては、人の忌むべき戦争も楽しみでしかない。戦う歓喜しかない。破壊や略奪や強姦を咎められることもなく、やりたい放題のお楽しみでしかない。勲を上げることしか思わない。吟遊詩人が詩を歌うようなものだ。

先祖の名に栄光を供養する行為としか思わない。人生に懷疑はない。迷いもない。究明も求道もない。解明もない。哲学は鋼の胸にある非情の心のみ。

「ドウ・ヴィーは、我らが胸に過酷さを与え給う」

彼らは誇らしげにそう謳う。ドウ・ヴィーは彼らの祖先で、世界最初の騎士にして吟遊詩人とされ、太陽の炎の車を破壊し、天空を支配する雷神だ。戦士はすべて死後に彼の館に招かれ、永遠の戦

いと永遠の宴に興じて飽かず、無窮の幸福（真実）を得るとされていた。

優しさは淀んだ空気、異様なこと、生命の終わり。過酷なところが鮮烈な空気、生命の鮮やかさ、真の生命、真実であった。

戦で死ぬなど懼れもせず、手足に矢が刺さx zろうとも、茨の棘くらいにしか気にしないのだ。

「大ブルーデン万歳——！」

バーバリアン族の中でも、ひととき恐れられるブルーデン族はベルグアエ族やノーマジ族とならんで、巨漢の蛮戦士が多い。

「待ってたぜ。木の根っこを枕の休戦に、もう飽き飽きしていたところだ。ぶっ」

唾を吐き、シドは言った。

ジヴィーノに引けを取らない巨漢。武器は斧だ。彼は鬚を伸ばさない。斧の刃の切れ味を試すために常に刺っているからだ。

「そら、祝杯だ。たらふく飲もうぜ」

口髭を盛り上がらせて左右に垂らすハンビーがそう言って、山羊の革袋の葡萄酒と、櫂を刳り抜いて石の栓をした筒の蒸留酒を煽る。鉄槌が彼の武器。重さは二百ポンドを超えるが、彼は梓の小枝の鞭のように自在に振り回し、飛んで来る矢すらも叩き落とした。

この兵たちは誰も彼も楽々と灰色熊を素手で絞め殺すような連中ばかりである。熊の硬い毛皮とぶ厚い皮下脂肪と強靱な筋肉を突き破って肝をつかむこともできた。

角笛が空気を裂く。それを追うように、数本的大型低音金管楽器（戦場を引きずり回され傷だらけで錆びつき、ボロボロであった）が唸りのような不気味な音を轟かせた。彼方にいた鳥たちも怯えて飛び散る。

地鳴りのごとく数十人の蛮族は、草丈低い平原に打って出ると、そのおどろおどろしい姿を現した。その恐ろしさときたら、夢にも出そうなほど。長髪を靡かせ、鬚を長く垂らし、鎧をまとうのはましな方、裸身に毛皮、剥いだ獣の頭部を被り、熊や猪やオオカミの牙を数珠つなぎにして首飾り、腰紐に髑髏を結びつける者らも。

鎖に鉄球をつけた武器や石斧、棍棒や大鎌など武器もさまざま。口髭だけを長く、地面につくほど垂らし、セイウチのような見掛けの巨漢、髪にバターをなすりつけている者らもいた。

「我こそはドウム家の高貴なる勇者グンディバールの裔、アガムの子、ジヴィーノ・マッグムだ。

いざいざ、名のある猛者よ、出でよ、ここに一太刀、我と合わせよ」

馬を駆って最前線に飛び出たジヴィーノは大いに呼ばわる。その威風堂々、馬も通常の倍くらいの巨馬であった。

バーバリアン族の戦争は一騎打ちである。

「おう、望むところよ。」

我こそはギジューヌ家のワトーが裔、ジャンの息子、ヴィクトルだ。膂力自慢の端武者など、敵ではないわ。

狼藉者どもを成敗せんとする我らが一族の正義、大義。何ぞ敗れんかは。剣の妙技、神技を見よ。精神こそが人の本質なり。魂の力は無限なり。

真に至りて天をも動かす」

7フィートはあろうか、精悍な背の高い戦士だ。鋼の鎧には金や白銀で浮彫の装飾が施されていた。兜からあふれる金髪を揺らす。手に持つは5ヤードを超える長槍。

ゴーニユ族がブルーデン族の領域に侵入し、攻撃を仕掛けてきた直接の原因はゴーニユの商人が襲われたことに起因する。だが、その以前に、ブルーデンの黒い森でゴーニユの若い貴族らが狩りをしたことが、ブルーデンの憤激に火を点けていた。

要するにこういうことの繰り返しなのである。

「精神の力は確かに地をも動かさん。汝の言うところ、さもありなん。されど。」

さもありなんとでも、横溢せんばかりの圧倒的な物力は、一切を凌駕する」

ジヴィーノは鋭利なる長槍の穂先に怖じるところか、嘲り憐れむかの表情で、いつきに間合いをつめる。

「いざ、勝負、正々堂々と」

「我が槍を受けよ、稲妻の」

すさまじい勢いで躬に迫る尖刃も物とせず、ジヴィーノが鞘から抜いた剣は刃渡り7フィート（刃の幅は2フィート）。

「うらあーっ」

旋風を起し、空を切り裂く音声とともに、たちまちヴィクトルを馬ごと縦に真つ二つにしてしまった。

力だけで押し切り、技量もへったくれもない。

敵方の陣では、畏怖と驚嘆の声と、青ざめた雑兵たちの顔色。形勢は決した。

「おらー、行くぜ。ジヴィーノばかり楽しめますな。手柄は奴ばかりのものか」

数十騎の戦士が縦横に数百の戦士の軍をかき乱し、斃す。

その日、ブルーデン族は侵入して来た五百のゴーニユ族を小勢で打ち破り、この後に繋がる快進撃の端緒とした。

後に歴史家たちは、この戦をオールド・ストーンの戦いと呼んだ。記録もなく、名の失われた古代の民族が祭祀を行った巨石の遺跡がある原野で、オールド・ストーン原という場所であったからだ。石に刻まれた文字もあったが、誰にももう読めない。

勝利の後、ジヴィーノが真つ先にやったことは、休戦条約を結んだ族長スガレッグの糾弾であった。

「我らが誇りを疵つけた。相手が二千のローマニ帝国軍精鋭ならいざ知らず、たかだか一〇倍のガリー人（又はガリー族。ゴーニュ族はガリー人の一部である）ごとき、激越なる昂奮の嵐に等しい我が氏族の敵ではない」

「ドウ・ヴォー神も怒りおろうぞ」

シドも拳を振り上げて同調する。ハンビーは言挙げた。

「族長は戦の産声を挙げた者がふさわしい。誰しも同じ魂を持つが、その声は同時ではなかった。正義と戦士である我らが真の神が彼を選んだのだ。それはアガムの息子、ジヴィーノ・マツガムだ」豊かな頬髯のスガレッグは金の王冠を捨てた。

「異存はない。ジヴィーノはドウーム家の高貴な血筋だ。イクザの裔、オンドオルの息子であるこのスガレック・マツコンドオルを屠れ。我が身は神の怒りをなだめるために、贄とならん」

そう言つて、左手で剣をつかむと、自らの右腕を切り落とす。前腕が失われた。

誰一人眉一つ動かさない。

「応よ、言われるまでもない」

戦士らは次々と武器を手にして族長を殺戮し、粉々になった骨肉を祭壇に捧げた。

ジヴィーノは落ちた王冠を拾つて、じつと眺め、自らの手で自らの頭に戴冠した。彼は戴冠の儀など望まない。「神随なぐもに」と誓いの言葉をつぶやいただけであった。

ブルーデン族は歓呼の声を上げる。

「幸いあれ！」

だが、ジヴィーノはそれに応えず、ただ、

「スガレックの怨霊よ、俺に憑け。その呪詛で我に崇れ。我が魂は磨かれ、強靱になるであろう。怨嗟は砥石に過ぎない。

もつと怨め、その呪いがあふれて、我が敵をも威嚇するまでに」

言つて哄笑する。

その夜は皆で酒宴が開かれた。野牛が数頭屠られ、大甕の『生命の水』が流れあふれる。髑髏の杯に牛の血や酒が満たされる。脂滴る肉の山と来たら、凄まじいばかりで、木皿などに盛り切れない

ので、炙られたものが木の串に刺されたままで配られた。バケツのようなジョッキはエールで満たされる。注ぐたびに、乾杯と氣勢を上げて杯をぶつけ合うので、あちこちに液体が飛び散った。

ジヴィーノは大いに酔う。席の隣には女騎士セレナがいた。長身で、波打つ濡れ黒の髪は腰まで隠し、贅肉のない肉体はしなやかで靱力に富んだ筋肉を持つ。

長い黒睫毛が放射状にあでやかに開花する真中に、燃える青いまなざしで、ジヴィーノをじっと見る。

「なぜ、戦いを知らせてくれなかったの。私に砦を護るよう言いつけて、あなただけで闘うなんて。死ぬ時はともに希う私の魂をあなたは裂く気なの」

ジヴィーノは微笑んだ。

「お前を呼ぶほどの敵ではなかったのさ。俺ほど腕の太い奴がゴーニユにいると思うか。さあ、鬱陶しい話はやめよう。俺の戦闘神を再び甦らせてくれ。生命の甘露を与えてくれ」

その後で深く眠る。寂莫の夜はたちまち裂かれた。

「敵襲だ」

その声にジヴィーノは飛び起きる。セレナは弾き飛ばされた。

「どこだ、どいつだ」

剣を佩き、鎧を身に着けながら叫ぶ。

シドが急ぎ寄って来て言う。

「ジヴィーノ、族長、ベルグアエだ。どうやら今回の戦いのために、ゴーニユの族長クラノスが支援を要請していたらしい」

「なるほど。肝心な戦争に間に合わず、今頃着いたというわけか。酒が醒めたわ。蹴散らしてくれよう」

砦は岩の上に巨木の堀を立てて囲み、その中で、木製の塔を中心に小さな窓しかない二階建てから三階建ての木造建築が数棟群れただけ、小規模なものだった。

ジヴィーノは塔に駆け上がった夜の森を見回す。いた。あちこちに炬火が見える。

「二、三百というところか」

「あゝ、そうだな、キング・ジヴィーノ。」

だが、兇暴さと膂力に優れた連中だ。油断はならんぞ」

ハンビーが髭を噛みながら言った。

超然たる笑みで若き族長は応える。

「わかっている。俺は生まれてこの方、十九年間、鬚を剃ったことと、戦で手を抜いたことは一度も

ない。七歳でワীগ（巨狼）を屠った時から、戦いだけが生命だった。鬚はその翌年から伸び始めた」

「わかった、わかった。おい、そんなことより、見ろ、火矢だ」

「矢で戦をする者は臆病者だ。俺が出て行く」

「だが、こちらが使わねば防戦できぬ。塀の上の者たちに矢を射させよう」

「そうか。それは、お前に任せた」

塀の上には簡易な足場が組まれている。数十人の兵がそこに上って弓を構えた。

「こちらの位置は高い。敵の火矢もそうそうは届かない。この絶壁の岩の上まで来る者は稀だ。十分引きつけてから射よ」

ハンビーは指示する。ジヴィーノは岩の裂け目を騎馬で落下するように駆け下って（城砦への正規な常用通路ですら、そんな路しかないのだ）、中腹の狭き石門を飛び出し、岩山を飛び跳ねながら移動する羚羊のように地上へ下った。数十騎の戦士がそれに続く。

「卑怯者ども、名乗れ、我こそはブルーデンのキング、ジヴィーノ・マッガムだ。名乗れ！ 名を重んじよ」

すると、一軍の中から音声する者がある。

「ほほう、膂力随一の猛者か。」

貴様がいつから族長になったのか」

「その声は、ポワール家のエルクサンドか、エイクの息子よ、お前がその軍の将か、お前の指揮か。ザヴィール王の甥よ、ゴーニユの要請に応じた王の指示で来たのか。」

ふ。

訊くまでもないことだったな。弱い者は助け合うがよい。だが、いずれにせよ、エルクサンドよ、耳あらば聞け。

よいか、ブルーデンの王に誰になるかを、いちいちベルグアエにどうこう言われる筋はない。血盟の者ならいざ知らず、虎視眈々、爛々たる眼で我が領土をにらむ者に、なぜ告げようか。知らせる理由はない。とつとと失せろ、この地は聖なる戦士しかいらぬ」

激戦が始まった。

黒き森の夜陰の戦いは混乱に満ちる。敵味方も定かではない支離滅裂、昂奮と狂暴さがぶつかり合う滅法な戦であった。昼間のゴーニユとの戦いのようにはいかない。不意を打たれて氣勢が殺がれていた。

ジヴィーノの後ろでシドが叫んだ。その太い腕にベルグアエの金髪の巨漢の首を締め上げながら。

「一時撤退しよう。ここで死んでは先祖に申し訳ない。歴史に燦めきを遺さずして祖廟の御霊が赦そうか。名誉がなくしていか世に立てようか。虚しく一族に恥を残すのみだ」

「俺は退かん」

「キング、その責任を果たせ」

ジヴィーノは齒を喰いしぼる。

「ぬぬぬ。この無念、必ずや晴らす。この雪辱を」

岩に引き上げる。

殿を三名の兵が引き受けた。レリーという若者と、ステーヴィイという壮者と、ロニーという老兵だ。三人は生きて戻ることはなかった。弩という、怖ろしい武器によって撃たれ、斃れたのである。石門を抜けると、ジヴィーノはすぐに振り返った。

「ここで迎撃しよう。レリーたちが戻るまでは閉じない」

哀しげにザブルグという兵が言う。

「キング、無駄です。三人とも弩に撃たれて死にました。この眼で見たのです」

ジヴィーノは天を仰ぎ、瞑目した。そして、

「あのような非道な兵器を、神聖なる戦いにおいて使うべきではない。あれでは戦士は戦士として闘えぬ。人はまるで礫を投げられたリングゴのようだ。戦士はチェスの駒ではない。あれは闘いではない。弓では届かぬところまでも届く。名乗りもない。卑怯千万だ。

おお、勝てばよいという愚劣者に生きる資格はない。利器に頼る者どもは、永遠に呪われて、地獄の底に苦しみ、二度と救われることはない。

俺はいずれ多くの民を随わせ、あのような兵器を廃絶するだろう。それは敵のためですらある」

その時は、誰もそんなことが可能だとは考えていなかった。ただ、ジヴィーノの強い決心に圧倒されていた。

戦士たちは瞑目し、死んだ仲間たちの死が戦士としての死であったことをドウ・ヴィーが認めてくれるよう希い、祈る。

「さあ、行こう。今は退く。だが、天の命令は革まらねばならない。俺は知った。

ドウ・ヴィーの精神が世界を蔽うようにならねばならない」

天命が革まる。これが後の世に『革命の誓い』と呼ばれるものであった。

門は閉ざされる。石の扉には焰の円を光背にするフェニックスの紋が浮き彫りにされていた。

黒い城砦はまるで教会のようであった。

もし鳥となって上空から見ると、その平面図は十字架である。クロスする部分に採光の機能を持つクーポラ（半球形の屋根。ドーム）が架構されていた。

ファサード（建物正面）には、薔薇窓に似た炎の円形装飾があり、左右にレイピア（刺剣）のような尖塔が聳え、大小三つの入り口があつて、それぞれが身廊と左右の側廊へ通じている。

繁縷なる彫りの絡む鉄の扉から中に入ると、内部は円柱とアーチ、荘厳な彫刻の群れによる装飾が奢られ、穹窿天井は遙か高く、リブ・ヴォールトに支えられていた。

もし、周囲を高い城壁で囲まれているなければ、まるでカテドラルのようであった。黒であることも、教会とは違うことを如実に語る。

むろん、キリスト教徒ではない。

城のある場所は、北の荒波が岩を激しく洗うノーマジイの殺伐たる岸、入り江が深く複雑に入り込んでいくリアス式海岸であつた。

黒灰色の石の城に棲むノーマジイ国のバイキング王トールはまだ二十代後半である。風貌は到底バイキングの頭ではない。

白い髪を垂らし、黒い貂のマントと黒いシルクのローブを着ていた。巨漢の多い国にあつて、繊細な線の細い（背は高いが）白皙のきめ細やかな肌の青年である。

黒い御影石の謁見の間で、冷たい玄武岩の玉座に坐し、大臣や將軍や神官を左右に集め、ゴーンユの使者の言葉を興味もないと言わんばかりの無関心な冷たい薄青い双眸で、倦怠を交えながら睥睨し、聞いていた。

そして、ゆつくりとした口調で応える。

「よからう。

我が国はジヴィーノ・マッガムが王であることを認めない。彼に正当なる裁きを与えることに協力しよう」

「大義成就のため、深く感謝申し上げます。我が王もさぞかしお悦びになることでしょう。ベルグアエ軍は既に今頃は砦攻めを始めているところかと存じます。王のお力添えがあれば、もはや勝つたも同然」

さような追従の謝辞を述べて、いそいそと（何か恐ろしいものから逃れるかのように）使者は去った。

トール王は手招きでゴースラム將軍を近くに來させ、尋ねた。

「東の蛮族の動きは？」

「アンゴルモ族のアッシュュラはイヴオーノ雷帝の討伐にも関わらず、ルージンの地を荒らして廻っております。南に残っていたバーバリアン人（南バーバリアン人）も遂に西への移動を始めました。まもなくローマニの領土に侵入するでありますよう」

「すると、ローマニ帝国軍はが遠い親戚どもを『歓待』するのに忙殺されるな。バーバリアンの土地への監視はおろそかにならざるを得ない」

「さようです」

「三千の軍を進めよ。」

ザヴィール王へ使いを出せ。ブルーデンをつぶし、土地を奪おうぞ、と。無能なゴーニユのクラノス王を廃し、ガリー人の土地を分割して統治しようぞ、とな」

1
2
3
4
5
6
7
8
9
0
1
2
3
4
5
6
7
8
9
0
1
2
3
4
5
6
7
8
9
0
1
2
3